

## 嘆かわしい文化や 知への無理解



柴生田 晴四  
(経済俱楽部理事長)

▼新型コロナ感染拡大に伴う緊急事態宣言が5月12日以降も月末まで延長されましたが、12日から条件付きで再開が予定されていた国立の博物館や美術館などの文化施設が東京から強い要請で再開見送りに追い込まれました。当初、政府は、客が静かに鑑賞する施設は人数制限などの条件付きで再開容認の方針でした。荻生田光一文部科学相は11日朝の記者会見で、「芸術は心を癒し勇気づける」

▼最初の緊急事態宣言の時から疑問だったのは、図書館や教育施設がいち早く閉鎖されたことです。この時は政府との協議で書店への休業要請は撤回されましたが、今回は書店も休業が続いています。外出を自粛する生活で最も良質の時間の過ごし方が読書であることを見定する人はいないでしょう。静謐な知識の拠点である図書館の価値を一顧だにしない小役人の浅はかさには呆れ返るばかりです。

▼昨年の感染の拡大に際して専門家と称する人々は「三密」が揃ったときに感染のリスクが高まるとの見解を示し、小池都知事も繰り返し「三密」の回避を呼びかけてきました。しかし、最近になって「三密」が揃わなくては感染するといった新説がささやかれていました。

として、再開に強い意欲を示していましたが、「人の流れを止める」ことを最優先する東京都に押し切られました。

▼都は1000平米以上の大型施設の休業を要請しており、やはり再開を熱望していた映画館も休業継続を余儀なくされています。しかし、その一方で、東京ドームなどのスポーツは人数制限付きで容認しています。感染リスクが問題なのであれば、静かに鑑賞する美術館や映画館はしっかりと換気さえできていれば問題がないはずです。人の流れを全て止めたいというのなら大勢の人が集まる施設やイベントは全て休業させなくてはなりません。都の対応は一貫性や合理性に欠け、何よりも文化や芸術への理解が感じられません。

す。そして今年に入つて登場したのが「人流」という奇妙な造語です。物流や血流は辞書にも載っていますが「人流」はありません。単に人の流れのことをいいたいのならそう言えれば済むことです。やたらと意味のない新語や怪しげなカタカナ語を振り回すのは、知性のなさを天下に曝すものでしかありません。

▼行動の自由や移動の自由、そして集会の自由などは、いずれも日本国憲法が保証する基本的人権の一部です。緊急事態にあって一時的にそれを制限することは認められるとしても、それが常態化すれば民主国家の土台を崩します。自粛要請には、科学的説明責任が欠かせません。国民生活に必要なのは、「新しい日常」ではなく、「普通の日常」なのです。